

心の栄養養剤NO37
声を出してお読み下さい。間違いなく心が元気になりますよ!!

モンロビア行きの列車

戦後間もなく、日本人の女性がニューヨークに留学しました。戦後間もなくなので人種差別、栄養失調、いじめにあっていました。そのうち、体に異常が出ました。診療所に行ったところ「重症の肺結核」と言われた。

その頃の肺結核は死の病でした。どうしたら良いかと医者に聞いたところ

「素晴らしい設備のあるモンロビア（ロサンゼルス近くのサントナム）に行きなさい」と言われた。その時ニューヨークからロサンゼルスは特急列車で5日間かかっていました。「死ぬよりはマシ」と思い恥ずかしい思いをして友人達からカンパを貰い汽車賃を集めたが、食料は3日分しかありませんでした。しかし「田畑を売ってでも治療費を送るので早く入院しなさい」という親からの便りを胸に列車に飛び乗った。

3日目に食料は尽きた。なげなしのお金でジューズを車掌にたのみました。ジューズを持ってきた車掌が言った「あなた重病だね」彼女は「私はこういう状態でモンロビアに行く途中です・・・行けば助かるかも知れない」車掌は「ジューズを飲んで元気をだしなさい。きっと助かるよ」

4日目の朝、車掌がジューズとサンドイッチを持ってきてくれた。「これはほんからのプレゼントだよ、さあ、元気をだしなさい」4日目の夕方、車内放送が突然流れた。

「皆さん、この列車の中に日本人の女子留学生が乗っています。彼女は重病です。ワシントン州の鉄道省に電報をし、会議の結果モンロビアに臨時停車させなさいと指令が来ました。朝一番にこの列車が停車するのは終着駅のロスアンジェルスではありません。彼女を降ろすためにモンロビアに臨時停車させます」車掌が来て「安心しなさい」

手早く荷物をまとめて乗車口近くのコンパートメントに運んでくれました。

夜明け前にモンロビアに着くとそこには、車椅子を持った看護婦さんが数人待機していた。そこに乗せられたとき、そっと乗ったつもりだったのだが列車が何かざわめいているので彼女が振り返りびっくりした。

「等・二等の窓という窓が全てあいていてそこには、アメリカ人の乗客達が半身を乗り出して紙切れに住所や電話番号を書いたものにドル紙幣を挟んで紙吹雪のように投げてよこしてきた。そして「死んではいけない!きつと助かるから大丈夫、安心しなさい!」とか

「もし人の声が聞きたくなったら私の電話番号に電話してきなさい!手紙を書いてきなさい!」さみしくなったらいつでもいいよ!」と声をかけてもらった。感動で涙があふれてきました。「3年ほど入院しているんですよ」その間も毎週毎週見知らぬアメリカ人が見舞いに来てくれた。これも列車の乗客たちだった。

3年間の膨大な治療費・入院費を払って退院しようとした時、それもお金持ちの一人の乗客が全て匿名で払ったあとだったというのです。

この列車の乗客の誰が偉いかと言う話ではなく、それぞれがそれぞれの役割の中で、出来る事を一生懸命やっただけのことです。

それぞれにこの世に生を受けた意義がある。

隣と比べるのではなく自分自身の生き方、昨日の自分・今日の自分そして明日の自分と比べる、出来る範囲でいいから、一生懸命心豊かに生きるということが大事と教えてくれた実話です。

最近、ミヤンマーのサイクロン、中国四川の大地震そして、日本での岩手・宮城内陸地震など信じられないような、目を覆いたくなるような悲惨な災害が続いています。

その災害を報じる画面を見るたびに、なぜか私には、この「モンロビア行きの列車」の話が頭に浮びます。

こんな時、私一人として何をすべきなのか何が出来なのかと・・・自問自答する毎日を通り過ぎていきます!!
他人事、人事と思ってしまうようになる自分に自己嫌悪を感じつつ・・・

P.S.
ミヤンマーのサイクロン以来今日まで目に入った「募金箱」には頑張ってすべてパーフェクトに募金しようと思いましたが!!
募金する時いつも心の中で・・・

「こんな事しかできないけど頑張ってる!!」

と言葉をかけながら・・・
被災地の皆様に一日も早く「当たり前」の生活日々に戻られる事を心より願い、お祈り申し上げます。